

ISBN978-4-900783-57-7
C1021 ¥1500E

定価[本体1,500円]+税



9784900783577



1921021015004

丹後守護
一色氏代々控

梅本政幸

丹後守護

一色氏代々控



梅本政幸

かったようである。法名竜勝寺殿天嘉衍行大居士。舞鶴行永の竜勝寺へ葬られた。備後福山の「一色歴代法名記」には「瑞雲寺宝山碧岸 葬丹州瑞雲寺」とある。

竜勝寺に祀られている木像は一色詮範のものと伝えられているが、これは恐らく義有のものであろう。墓地には夫妻のものとと思われる二基の立派な宝篋印塔と、家臣と見られる墓碑が数基立っている。

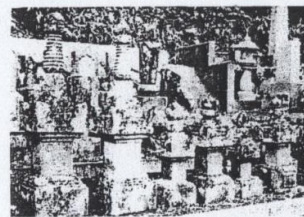
宮殿裏書に

一色頭梁慈光寺殿（満範）によつて七代義有為御病床。永正九壬申七月十日卯尅廿六才他界。法花竜勝寺。御北殿（夫人）云々。

翌十年（一五二三）四月義有夫人が大旦那となり、与謝郡筒川庄竝に加佐郡志楽庄より建材を集め、先の永正での変で焼失した妙立寺を府中に再建したことが裏書に記してある。

八代 義 清

五郎・右京大夫・義秀の弟義季（季岳）の子で、母は若狭守護武田元信の娘である。母の姉は越前の朝倉家へ嫁いでいる。元信の継子元光には姉妹にあたり、弟に新五郎がいる（丹後国



一色義有夫婦墓地（竜勝寺）



伝……一色詮範像
実……一色義有像

御檀家帳

守護代は延永春信であるが、加悦の石川勘解由左衛門直経がスポンサーで、義有に継子がなかったことから国人らの反対を押し切つて守護に迎えたのである。野史によれば十代義俊の討死後峰山の吉原城から迎えて義清と名乗り、宮津の細川陣へ斬り込んで切腹したことになるが、この話は七十年も後の事であり、全くの虚構である。

この後は重要史料である御檀家帳を頼る外はない。

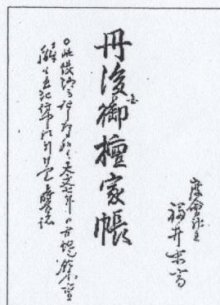
御檀家帳

はいし川（石川）。御屋かたさまの御しそくなり。若狭武田殿（元光）のおい子（甥御）なり。くにおとな衆申合、御かとく（家督）もたせ被申候。一の宮（府中）の本城の御座候。

これによると、義清は石川の御館様（義季（すえ）に比定）の子であり、若狭武田元光（元信の子）の甥で府中の守護所に住んでいたとある。

丹後の一色守護所の場所は現在不明であるが府中小学校の位置と推定される。背後に府中城と呼ばれる今熊野・阿弥陀峰両城があつて古城の遺構が残っている。

そもそも一色氏は中央指向が強く、今熊野・阿弥陀峰・難波



野・北野・嵯峨・大谷・陣屋などの地名が残っている。

季岳は義秀の弟で兄と共に南禅寺に出家していたが丹後守護が断絶しそうになったので、還俗させて丹後に迎え、守護につけようと画策したのであるが、夫人が若狭武田の出である為国人の猛反対にあい、止むを得ず病氣と称して石川城に隠居させ、子の義清を府中に入れて守護につけたものとみられる。

若狭から守護を呼ぶなどということはあり得ないことであるが、石川直経が將軍義植や細川澄元の支援を得し強引に強行したものであろう。このことは後で丹後国内に大乱を呼ぶことになる。

この後の行動を含めて石川氏の行動は全く異質なものである。
永正元年（一五〇四）義清は將軍義植に拝謁して献上品を贈り、これに対して將軍より太刀を一腰下賜されている（御内書案）

永正十年（一五一三）三寶院文書

幕府奉行人奉行書

丹後守護（義清）の山城国三寶院門跡領丹後国朝来（あせく）村（加佐郡）を横領するを停め、同院をしてこれを安堵せしむ。

永正十一年（一五一四）三月若狭勢が普甲山を攻め、加悦の

和田・日置等が討死している（縁城寺過去帳）武田元信が義清を支援する為の行動であるが、石川氏の輩下と思われる和田が迎撃している事が不審である。この頃から義清を除こうとする延永と義清を擁護する石川との紛争が強くなってくる。

八月若狭では隠居していた武田信親が卒した（武田系図）

宮殿裏書

亥三月書之

法花（ほうげ）妙立寺開山。その供殿（くでん）は一色五郎殿（義清）より寄進の品どもを供え 云々。

※永正十二年（一五一五）の開山法要記録と推定。

この年（永正十二年）延永春信は、義清を廃して一色九郎なる人物を守護につけようと画策し、石川や武田らと争って国内が錯乱してくる（宣胤卿記）

果然春信は義清を府中の守護所より追放したので、義清は石川直経を頼って加屋城へ走って籠城した。この時期はいつであるかわからない。

東寺過去帳

永正十三年（一五一六）八月一色右京大夫清与（と）、同九郎合戦。伊庭自北部（若狭）出張。同敗死。

※宣胤卿記には一色九郎元清とある。伊庭貞説は近江守護

六角氏綱の家臣で義清の加勢のため出陣して敗死したものである。

二水記の明応二年（一四九三）六月廿九日条に一色兵部少輔九郎とあるので義員のことかも知れない。

永正十四年（一五一七）六月二日春信は加屋城を攻めてこれを陥したので、義清と直経は武田に加勢を求めて若狭へ走った。これを追って春信は若狭へ入り、寝返った高浜の逸見国清と組み、八千余騎をもつて和田の岡本主馬介を葬り小浜へ迫った。逸見氏は武田の有力な被官であるが、武田が越前の朝倉と組む事を嫌がってしばしば叛乱を起こしたが、不死鳥のごとく取りつぶしにもあうことなく再起している。延永と組む事も再三であった。

東寺過去帳

永正十四年六月二日於丹後国両方死之族二千数百人。一色九郎殿亦被官守護代延永（春信）勝了。

五郎殿（義清）亦被官石河勘解由左衛門（直経）打負、カヤノ城落テ没落了。

ここで元信は援を幕府に求め、越前の朝倉孝景と同教景（宗滴）、近江の朽木植綱・伊庭氏ら加勢したので、延永らは加佐郡倉橋城へ退いて籠城した（朽木文書）

八月丹波の内藤筑前守守国も武田が加勢した田辺の河辺へ攻め込み、さらに倉橋城を包囲した。九郎方に味方していた高浜の逸見国清が討死し敗色が濃くなったので、春信は降伏して開城したが助命しられた。

九月六日義清・直経らは丹後国へ帰国した（朝倉始末書・明通寺文書・御内書集・宣胤卿記・朽木文書・若狭守護群記）

加越闘争記

永正十二年（実十四年）武田麾下逸見（国清）与丹州延永源六（春信）相携以八千余攻本国（若狭）。故元信求加兵於越前国朝倉孝景其族教景卒兵以来本国入、丹後国庫橋城。源六降。

朝倉仕末書

去る永正十四年に、若狭の逸見氏俄かに武田殿の意替して丹後の延永源六と云し者を語ひ、八千余騎にて若州へ攻入しかば、其比霜台孝景武田大膳大夫（元信）の智なりし故に加勢の事申し越しければ即教景大將とし若州へ進発ありける所に、延永其勢に恐れて一戦の不及勿引退して丹後国加佐郡庫橋の城に楯籠けるを、教景統て攻め入り即城の四面を取囲み息をもせず採（もみ）にもんで攻られければ、源六遂に降参し（八月八日）死を遁れて出にける。

其時源六

※蘭披景菫は南禅寺・相国寺の住職を歴任して、文亀元年（一五〇二）に卒している。

また瑞雲上人は中嘉といい、南禅寺の塔頭瑞雲庵の庵主であった。

石川の西禅寺に義季ものとみられる宝篋印塔がある。

新五郎については一色家古文書の中、「天文十三年十一月七日幕府一色新五郎知行洛中屋地を取り上げ、一色式部少輔晴具（政具の子）を代官職とする。」

とあり、ちょうど義清が歿落したと想定される時期と一致する。晴具は七郎系の一色同族で、丹後丹波郷の地頭であった。

※御檀家帳が成立した当時の丹後の中心地であった府中は次のようであった。

官衛

丹後国の国衛・郡家・丹後守護所・健兒所・細工所・印鋤所（溝尻・国司の印を納める）

寺社

丹後一の宮籠神社（大垣）。眞名井神社（難波野）。麓神

社（同）北野神社（小松）

国分寺（国分）国分尼寺（不明）法蓮寺（宝林寺・秋月庵・

小松）安国寺（小松）妙照寺（同）与内・万福寺（時宗

橋立道場・中野）慈光寺（同）成相寺・円浄院・法花堂・

妙立寺（同）。大乘寺（時宗・鉾立道場・同）大谷寺（大

垣）等

ただしこれらは先の永正の変で殆どが兵火にあつて焼失し、再建されたものもあればそのまま廃絶されたものもある。

城塞

府中城（今熊野城・阿弥陀峰城）・

成相寺城（当時は百米ほど上にあった）官衛の位置は現在はっきりしていない。籠神社付近に散在していたのではないかと考えられる。

九代 義 員

この人は丹後一色氏の中では全く埋没していて義幸・義道など架空の人物が登場し、史実もまた捏造されたものが多くなっている。

この人は三河一色系の出とみられ、永正十四年の変で義清と戦った九郎説もある。

愛知県知多市西屋敷の臨済宗法音山慈光寺の系図に

義範
 義直
 義遠——義長——直長——義員——義定
 とあり、知多市の龍雲山の大興寺の系図にも義遠四代孫左京大夫義員其子義定とある。

義遠については眞木島家系図に

一色義遠 城州住横島 後年姓改横島

とあり、文明十年（一四七八）三河より上洛したことがのせられてゐる。

義員はここで生まれたと想定される。員の名はかつて義遠がいた北伊勢の員弁郡より取ったものと思われる。

義有が病死した際に継子がなかったので、伊賀らが謀って丹後へ移し庇護し、その成長を待ったものと思われる。丹波の七郎系一色の晴具やその子藤長も後見したであろう。

御檀家帳の竹野郡の項に

しやうくわん寺（成願寺）

まへの御屋方さま（義有）御子なくて三河（横島党）へ御

ゆつりに候へ共、御内衆御志ゆんくわい（巡回カ）にて竹

野郡志やうくわん寺と申御城に御座候。

※御檀家帳は少ない丹後資料の中でもきわめて信憑性の高いものである。

この中で既に一宮殿様として次の守護の候補者とみなしている事に注目したい。

成願寺を選んだのは、伊賀の勢力下にあつて極めて目立たない場所であつたからであらう。

天文十五年（一五四六）丹後水軍が若狭の大飯郡を攻めた（長楽寺文書）。この年足利義勝が將軍となつた。後の義輝である。

天文十六年（一五四七）二月、若狭の粟屋光若・白井光胤らが普甲山を攻め、四月下宮津へ入り有田村・田中村（今の滝馬）京口で一色勢と戦い、石田の土方兄弟が討死している（宮津府志・白井家文書・縁城寺過去帳）

天文十七年（一五四八）正月若狭守護となる武田義統、前將軍義晴の娘を娶る（後鑑・若狭記）

天文十八年（一五四九）三月一色藤長の父七郎晴具が、三好政長討伐に摂津へ出陣して江口の合戦で戦傷死している（一色家子文書・細川両家記）

天文十九年（一五五〇）丹後勢が若狭の大飯郡を攻めた



一色義員花押

(遠敷郡誌・何鹿郡誌)

天文二十年(一五五二) 六月武田信豊は高国派の志賀次良右衛門を小浜に誘殺した。次郎右衛門の二男右京進五郎兵衛は田辺から志賀郷へ逃げ帰り、九月に再挙して田辺へ攻め入った。信豊は弟彦五郎信高として田辺を攻めさせたが信高は討死してしまった(志賀家文書・羽賀寺文書)

信高は細川藤孝の姉宮川殿(後に細川ガラシャの指南になる人)の夫にあたる。この時山県(がた)秀政と白井光胤が信高に従っていた。八月武田元光が卒している(武田家系図)

天文廿一年(一五五二) 九月粟屋丹後守久慶・逸見宗近ら若狭勢加佐郡を攻めた。十一月久慶らはさらに浜村に大志万但馬守を攻めて、泉源寺・堂ノ奥へ入って矢野備後守らと戦った(山口神社棟札・志楽略譜集・粟屋書状)

弘治元年(一五五五) 正月粟屋久慶は転戦して牡牛崎(志楽の高屋城に比定)の合戦に敗れて自刃した(粟屋書状)

弘治二年(一五五六) 六月武田信豊は隠居して義統が守職となった。(守護職次第・系図纂要)

※この年の四月美濃の斎藤義竜が養父道三を殺して、一色左京大夫を名乗った(信長公記)

弘治三年(一五五七)

この年義員の名がみえる。

大慈寺古記(網野町生野内) 宮津府志義

当国網野領方大悲寺(大悲寺の旧名)寄進分諸反銭事 云々。

伊賀越前守申趣得其意候者、不可有別儀候。

弘治三年九月二十日 義員(判)

大悲寺衆徒中

義員と思えるのは次の資料にも出てくる。

田辺府志 一色左近 宮津城

丹州三実物語 宮津大久保城 一色左近

織田武鑑 丹後宮津三万石 一色左近大夫 眞光

但し義員が宮津城や大久保城にいたという徴証はない。田辺城に移っていたと思われる。

永禄元年(一五五八) 五月丹後の大志万(おおしま)但馬守若狭佐分利を攻め、熊谷大膳直之・中島某らと戦う(上杉文書)

八月武田信豊は高浜の碎導山城より、小浜の後瀬山城へ帰陣する(羽賀寺文書) これは志賀党をようやく駆逐したことを物語る。この年信豊は子の義統と争って敗れ、近江へ出奔した(守護職次第) また丹波の守護代内藤宗勝(八木城主)が奥丹波(水上・多紀)へ進出して赤井・萩野。波多野らの勢いと争い、さらに丹後へ進出して与謝郡の大半を奪うという事件が起

は源義忠であつたとも考えられる。

五郎の後裔と伝える備前福山の一色氏歴代法号記に戒名の他に盛林寺殿 廿三とある。廿三才ぐらいであつたであろう。

熊本細川家譜

義有の男子二才。五郎云（中略）義有の御子五郎は剃髪して後愛宕福寿院の僧侶と成、幸能法師と云。幸賀の御住也。廿五才で而寂也云人（中略）

御本書通一色の御子也。幸賢法師也

と書かれている。

丹後一色氏は明徳三年初代満範が守護に任じられてより十代百八十余年で滅亡した。

■ 丹後一色氏の末裔

しかしその末裔は全国各地へ散った。特に近江一色氏・伊予一色氏のように京極氏を頼って散っていったのが目立つ。丹後にも守護所のあつた府中その隣の日置に多い。

江戸時代になつてから徳川家によつて優遇された者も多く、千石から二千石の直参となつた者も多い。明治元年には千石の一色摂津守の名がみえる。近江一色氏のように船代官に任じられたも

もある。海の一色にふさわしい。船代官といえば江戸時代の元禄十年（一六九七）久美浜湊村に大津代官所の船見番所が置かれている。

※天正十年九月五郎が切腹した時に竹野郡徳光の後藤下野守

安之助と熊野郡友重の小国若狭守が卒している（位牌銘）

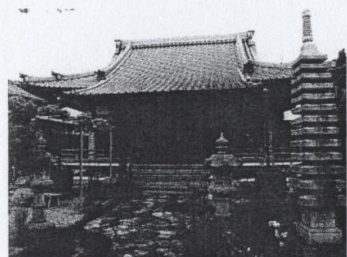
関連があるかも知れない。

天正十年九月、一色五郎が秀吉により、明智光秀に加担した疑いで切腹した後、一色五郎の一族はさていつたどこに行つたのであろうか・・・。

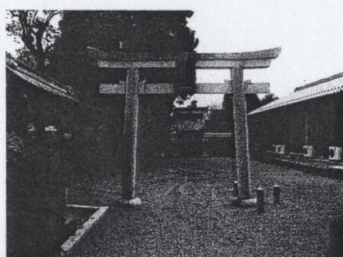
まず天正七年（一五七九年）に五郎の父一色義員が中山城で切腹した後、重之は天正八年（一五八〇年）に再起をかけ母方の河野氏を頼り予洲へと亡命している。

また、治兵衛は南部文書や明光寺文書によると天正一二年（一五八四年）に近江高島城主となつた京極氏（四職家の一家）を頼り近江に亡命している。その後京極高次の推挙によつて徳川家、戸田一西（五阡石）の臣下となり、関ヶ原合戦後（一六〇一年）に膳所藩「初代藩主戸田一西（三万石）」により矢橋港の船代官（知行は二千石）に任じられている。

近江栗田郡志、第二十節にはその他「船役料二十石」「屋敷に免租の名門」として徳川幕府より厚遇されている。



正高寺
（文禄三年五月開基）



一色 芝田稲荷神社
（寛永元年）



芝田清蔵書 花押



近江八景
矢橋の帰帆

また治兵衛の長男「清蔵」と次男「太郎左エ門」は寛永年間（一六二七年）には姓を「芝田」と改名し徳川親藩となり、清蔵の娘四人が「膳所藩主」本多公の推薦で宮廷に奉公に上がり「菊子の局」「左兵衛の局」の記念供養墓が草津市矢橋町の正高寺に現存する。

さらに宮津と大津のつながりは、文祿四年（一五九五年）より京極高次は大津城主（六万石）になるが、関ヶ原合戦の時、西軍一万五千の兵をくい止め関ヶ原に向かわせなかった功績により、慶長六年（一六〇一年）十月、若狭小浜（八万五千石）に転封している。そしてその大津城は膳所城が出来るまでの間「戸田一西」が藩主となり引き継いでいる。

又、京極高次の弟、高知は丹後宮津城主（十二万三千石）として転封して来ており、以後宮津と大津のつながりは大変深いものであったと思われる。

享保二年（一七一七年）より約十八年間に、現在の熊野郡全て五十三村、竹野郡六十九村、与謝郡二十二村、丹後郡（中部）十村、加佐郡四村、計百五十八村、約五万二千石が藩主所変えとなり大津代官所の所屬となっている。水軍国丹後の多くが大津所屬となった事が注目される。

ここ宮津は、昔は久美浜湾の湊宮にあり（海岸）船番所と呼ば

れていたので大津にもそれがあつたと思われる。

●伊也

丹後史の中では「菊」と出てくるが実名ではない。

藤孝の長女で忠興や興元の妹にあたる。永禄十一年（一五六八）山城長岡の青竜寺城で生れた。

天正九年（一五八一）五月、光秀の仲介で一色五郎に嫁いだ。十四才。翌十年九月夫に死別。十一月には藤孝のいとこにあたる京都吉田神社の神官卜部兼和の子兼治との婚約が整い、翌十一年三月宮津を発つて輿入れをした。兼治十九才、伊也十六才であつた。この異常な早さから秀吉の野心説が生れている。

野史では峰山長岡の姫御前村で一首残して自刃したとか、弓木城で稲木から投身したとか、家臣篠原五右衛門に再嫁したなど諸説が伝わるが、すべて誤りである。兄忠興夫人玉とは五才下であつた。

天正一四年（一五八六）長女満を出産し、翌一五年宮津へ里帰りをしている。同十八年（一五九〇）長男賢鶴丸を出産している（兼見卿記）

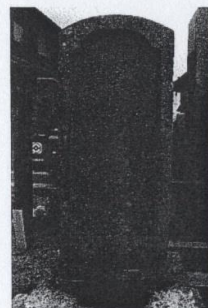
正高寺の開基にともない
一色公深墓



菊子の局



左兵衛の局他2名



おわりに

丹後の歴史を手がけて五十年になります。

特に中世の中で丹後一色氏については何とかして真実に近づけたいと念願していたところ、八王子市の一色芳雄さん・正人さん父子と知り合いました、多くの史料をいただき、全国一色同族会と知多半島一色町と関東の幸手町とを紹介していただきました。

先に「丹後の国」を発刊してからこの事も発表したいと念願していましたところ、近江一色の末裔芝田守さんと知り合い、その支援でようやく活字にして発刊することができました。ちょうど宮津文化賞の受賞と叙勲と米寿とが重なりましたので、よい記念だと思い、芝田さんの好意に甘えることにしました。

まだ解明できない事も多少ありますが、これはこの後の研究者に委ねることとし、今の段階では最大限の努力をしたつもりです。

史料のつもりですから難解な所も多いと思いますが、ご愛読下されば幸いと存じます。最後に印刷を担当して下さったあまのはしだて出版の社長さん以下、並々ならぬ協力とご努力を賜りました事を衷心より感謝し御礼を申し上げます。

平成二十三年十月

梅 本 政 幸



梅本政幸氏プロフィール

京丹後市生れ

宮津在住

公立中学校校長を退職・民生委員・

行政相談員を歴任 88歳

宮津市文化協会賞・瑞宝双光章受勲

「丹後国」「細川ガラシャとその縁者」等を著述

丹後守護

一色氏代々控

二〇一一年十月二十八日発行

著者 梅 本 政 幸

(丹後地方中世史研究会)

資料提供 (甲州一色氏末裔)

一 色 正 人

発行者 (近江一色氏末裔)

芝 田 守

発行所 あまのはしだて出版

〒616-0043

京都府宮津市宇惣三八二

電話〇七七(三三)一〇〇一八

印刷所

(有)はとプリント